

但馬守殿遺敷座を立て、我公の御前へつゝと御出、御太刀是へ御渡と被申請取、紀州御使者より先達て御披露有之、尤無別條御目見被遊候。是日御歸館被成成本多彌兵衛急に御招被成、今日於殿中如此の首尾にて御違却被成候。壹岐守殿は、彌兵衛殿舅にて兼て御出入の儀に候間、如何様の譯にて前々とは御格も被替候や、委細御聞被成度と有之。彌兵衛殿へ被相尋候處、御代替の後にて諸事胡亂之躰不分明、壹岐守殿返答に候。彌思召も解不申、數日御憤の事共止不申候。某追て竊に承候へば、文昭公御好にて其日より御格式可相改と有之候處、右段々御様子にて、但馬守殿機轉出來にて、夫以來萬端如元の御作法に罷成候由也。寶永年中本郷の邸延燒の頃、天澤寺前辻番所の井へ、夜中白狐落て死けり。翌朝足輕番所の者共見付候て、早速聞番并御横目熊谷半助割場奉行等へ案内仕候。尤達御聽早速公儀御役人中へ相斷候處、御徒目付并御小人目付數人罷越、見分の上にて番人共へ申候は、か様の時の爲に默醫者有之候。何れへ爲御見候やと申候。御覽の通り死切申躰に見え申候。夜中は見付不申、今朝見付候事に候故、默醫へ案内にも不及

候由答候處、先づ其儀落度に候。ならぬ迄も先づ取擧候て看病も仕、療治不叶候はゞ格別に候。無左候得ば見殺し申と申ものに候。足輕共の儀は輕き者共に候へば不及是非候。重立候御役人中、其心付無之儀は如何と申候。類燒に付此邸内には、横目役一人有合候處、其者忌中に付此儀に頓着難仕、駒込の邸に罷在候者呼寄候内、彼是と延引に罷成候旨申候へば、是又難心得候。忌中と申者は、上様等の御目通りへ罷出候儀は相控申も聞え申候。此白狐生死を見届、醫師等申談じ候事は、忌中の構可有之様は無之候など、色々事六敷申掛、畢竟其夜番人足輕八人、重罪の旨申立禁牢に及候。白狐は取擧候て埋置、追て御詮議次第と申事にて、聞番・御横目・割場奉行も事六ヶ敷罷成、足輕共は畢竟死罪の趣に相聞候處、其後何の沙汰もなく罷成、足輕共も皆無別條相勤候。此儀も後承候へば、松雲公御自身態々秋元但馬殿へ御越御逢被成、思召の筋被仰述、夫故事輕く相濟候由に候。其思召の儀は未承候。

一、福島關所鐵炮通過の事

松雲公享保二年初て自岐岨路御歸國の時、福島關所御

通に付、御鐵炮の儀山村甚兵衛殿への御届入申儀に候。其趣聞番澤田源太夫を以て、御用番水野和泉守殿へ御届候所、御直判の御願紙面御出可有之旨御指圖にて、其後源太夫承罷歸致言上候處、散々思召に不叶、聞番役はか様の儀第一に可相意得事に候。此以前青山織部・笹田助左衛門等御用人相勤、其外聞番も勤候者は、御家の輕く不能成様に取計候。か様の儀に御直判之御願紙面、又は御證文など、申儀、御先代以來終に無之事に候。左様の覺悟も無之、うかと致承知罷歸申上候儀、不覺悟の至に思召候。中々御願紙面など御出は不被成候旨御意にて、源太夫儀迷惑至極仕候得共、可仕様も無之、數日を經候處、泉州より源太夫呼に參り罷出候へば、福島御關所御鐵炮六十挺相通候事は、和泉守殿より山村甚兵衛へ迄、奉書を以て被仰遣候間、御通りの節御家老中より證文可被指出との御申渡にて事濟候。是は何方より如何様の趣にて、如此譯立候やと各不審に存候へ共、其仔細しれ不申候。程經候て奥御右筆の内大橋藤藏是は本多安房守家來に大橋全可と申者有之、大平記評判之傳受仕候軍法者有之、其次男浪人仕居候て、後江戸表にて御右筆に相濟候。御考申方證書は御右筆の内より相勤候。奥御右筆は別て御證密方へも罷出候に付、記録の事に御監年中御家御出入仕候。 山本源右衛門へ逢候て咄し候

は、岐岨路御通に付御鐵炮の儀に不存寄事にて、相公様林大學頭への御直書を致拜見、甚驚入申事に候。有増の首尾可申聞旨にて申候は、或時御老中列座にて、藤藏も片隅に祇候仕居候所へ、水野和泉守殿へ迄林大學頭より狀箱到來に付、泉州披見有之、順々に御廻し、久世大和守殿末席にて披見有之、加賀守殿にはか様の事も可有之旨、兼て存候旨申挨拶有之。大學頭へ返狀相濟、其上にて山村甚兵衛へ奉書の儀相認追付被遣候。如何の趣にやと存罷在候處、其以後和泉守殿、其一巻數通の紙面一括藤藏へ御渡し、此一巻は類寄に仕り記録可仕旨にて御渡、一々披見仕候所、相公様より大學頭へ迄御直書有之、其内に此度福嶋御關所御通に付、鐵炮の過書御直判の御願紙面御指出候様に、和泉守殿御指圖有之候。乍然御代々終にか様の儀、御直判御紙面御出し被成候舊例無之候。御家老共より證文指出事濟申候事に候。

一、警者城千代病中の歌

余が家に往來する警者城千代、今年仲秋病中の歌。

埋れて秋は今宵と思ふのみ月を見るべき身にしあらねば